

## 複雑述語の形成に伴う事象構造の合成と項の実現

大阪大学 由本陽子

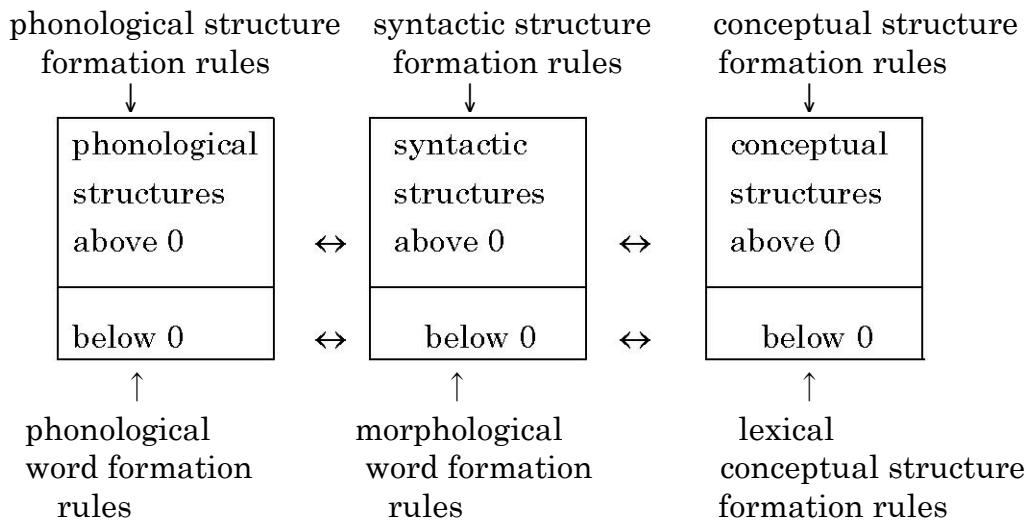
### 1. はじめに

- 本発表では、二つの事象構造が融合し一つの事態を表すようになっている日本語の複合動詞や複雑述語において、それぞれの事象構造に存在する項の統語的実現には、複雑述語形成のメカニズムによる違いが見られることを示す。

### 語形成のモジュール性

- 統語的複合動詞と語彙的複合動詞 (影山1993)
  - (1) a. 泣き叫ぶ → \*そうし叫ぶ (Anaphoric Island)
    - b. 走り続ける → そうし続ける
  - (2) a. 泣き叫ぶ → \*お泣きになり叫ぶ (Subject Honorification)
    - b. 走り続ける → お走りになり続ける
  - (3) a. 押し開ける / \*押され開ける (Passivization)
    - b. 愛し続ける / 愛され続ける
- 概念意味論の表示的モジュール性の語構造への拡張 (由本 2005b)

図1 モジュール形態論と Jackendoff の表示的モジュール性を想定したモデル



- (4) a. 彼の言った言葉を {書き損ねた / 書き落とした}。
  - b. 彼の言ったすべての言葉を書き損ねた。ALL > NOT
  - c. 彼の言ったすべての言葉を書き落とした。ALL > NOT
- (5) a. ワールドカップを毎日見たが、すべての試合は見損なった。ALL < NOT
  - b. ??ワールドカップを毎日見たが、すべての試合は見落とした。
- (6) a. 彼の言った言葉すべては書き損なった。ALL < NOT
  - b. ??彼の言った言葉すべては書き漏らした。

①語彙的複合動詞においては、二つの動詞のLCSが合成しそれをもとに単一の動詞として項構造が決定されるが、統語的複合動詞においては補文構造が保持されるのでV1の項はそのまま実現される。

- ②語彙的複合動詞の項実現においては、原則としてV2の素性が優先されるが、統語的複合動詞においては、一部のV<sup>0</sup>補部型を除いてV1の素性が保持される。
- ③事象名詞を目的語とする複雑述語においても、V2が参与する複合動詞形成のタイプに準じた項実現が見られる。

## 2. 語彙的複合動詞におけるLCSの合成と項実現

### (7) VI+VT → VI

- 太陽が浜辺に照りつける、その場に居合わせる、風が吹き上げる
- 同じ電車に乗り合わせる、男になりきる、親に働きかける、鳴き交わす

### (8) VT+VI → VT

絵を眺め暮らす、物を持ち寄る、女を連れ歩く、アイデアを思いつく

### (9) VIa+VIb → VIa

- 世間{に／\*を}知れ渡った事実 (cf. 世間を(PATH)渡る)
- 会場が静まり返る (cf. \*健が自室に静まり返る)

### (10) VTa+VTb → VTa

- \*家を町から焼き払う (cf. 棚から埃を払う)
- 年貢を小作から取り立てる (cf. 看板を庭 {に／\*から} 立てる)

### (11) VI+VT → VT

- 眼を泣きはらす、親を泣き落とす、教祖を伏し拝む
- 車{を／\*に}乗り回す、電車を乗り換える、メダルを勝ち取る

### (12) VT+VI → VI

- (\*ウィスキーを)飲みつぶれる、(セーター {\*を／で} )着膨れる
- 美声{に／\*を}聞きほれる、ひたい{に／\*を}張り付く
- 先行部隊{に／\*を}追いつく、少女{に／\*を}襲いかかる、押し入る
- 折り曲がる、擦り切れる、打ち上がる、積み重なる

### (13) VIa+VIb → VIb

- (\*グラウンドを)走りくたびれる
- 犯人に躍りかかる (cf. \*犯人に躍る)

### (14) VTa+VTb → VTb

- 先生を言い負かす (cf. \*先生に意見を言い負かす)
- その場を言い逃れる (cf. \*上司にうそを言い逃れる)

### (15) V1とV2の両方から素性を受け継ぐ

- 部屋におかずを持ち寄る
- 残飯を家に持ち帰る

## ●選択素性・下位範疇化素性は合成されたLCSをもとに決定される。

原則としてV2が意味的にも統語的にも主要部となっている。

### (16) (付帯状況) xがyを持ち寄る : $[[x_i] \text{ CONTROL } [[y] \text{ BE } [\text{WITH } [x_i]]]]$

(yがxの所有物である状態)

+  $[[x_i] \text{ CONTROL } [[x_i] \text{ GO TOGETHER}]] \Rightarrow$

$$\left[ \begin{array}{l} [[x_i] \text{ CONTROL } [[x_i] \text{ GO TOGETHER}]] \\ \text{WHILE } [[x_i] \text{ CONTROL } [[y_i] \text{ BE } [\text{WITH } [x_i]]]] \end{array} \right]$$

### (17) (手段) xがyを蹴り上げる : $[[x_i] \text{ CONTROL } [[x_i] \text{ ACT ON } [y_j]]]$

+  $[[x_i] \text{ CONTROL } [[x_i] \text{ CAUSE } [\text{BECOME } [[y_j] \text{ BE } [\text{AT } [\text{UP}]]]]]]]$

⇒ 
$$\left[ \begin{array}{l} [x_i] \text{ CONTROL } [[x_i] \text{ CAUSE } [\text{BECOME } [[y_j] \text{ BE } [\text{AT } [\text{UP}]]]]]] \\ \text{BY } [[x_i] \text{ CONTROL } [[x_i] \text{ ACT ON } [y_j]]] \end{array} \right]$$

(18) (補文) xがyを書き漏らす:

$[[[x_i] \text{ WRITE } [y_j]] + [[x_i] \text{ FAIL } [\text{IN } [_{\text{Event}} (z)]]]]$   
 ⇒  $[x_i] \text{ FAIL } [\text{IN } [_{\text{Event}} [x_i] \text{ WRITE } [y_j]]]$

(19) 振り混ぜる: {\*ビンを/ドレッシングを} 振り混ぜる

$$\left[ \begin{array}{l} [x_i] \text{ CONTROL } [[x_i] \text{ CAUSE } [\text{BECOME } [y_j] \text{ BE } [\text{AT } [[\text{MIXED}]]]]]] \\ \text{BY } [[x_i] \text{ CONTROL } [[x_i] \text{ ACT ON } [y_j] \text{'s CONTAINER}]] \end{array} \right]$$

(xがyの容器に働きかけることによりxがyが混ざった状態を引き起こす)

(cf. \*舞台のゴミを掃き清める、\*ニワトリの首を絞め殺す (影山:1993))

抱きつく: V1のTHEME(「を」格)とV2のLOC(「に」格)が同定 → 「に」

乗っ取る: V1のLOC(「に」格)とV2のTHEME(「を」格)が同定 → 「を」

(20) xがyをzから連れ去る(cf. x がzを去る) :

$$\left[ \begin{array}{l} [x_i] \text{ CONTROL } [[x_i] \text{ BECOME } [\text{BE}[\text{NOT}[\text{AT } [z]]]]] \\ \text{WHILE } [[x_i] \text{ CONTROL } [x] \text{ BE } [\text{WITH } [y_i]]] \end{array} \right]$$

(xがyを同伴しながらzを離れる)

(A) LCSの合成における右側主要部の規則と項の統語的実現

I. LCS内のすべての変項は原則として統語構造上に実現される。

II. 同定された項は統語構造において同一の項として実現される。

III. V1の主語がV2の主語と同定されずに実現されることはない。

(日本語の複合動詞には適用されるが普遍性はない。cf. Li (1990))

←自動詞補文型では同定はない。

「折り曲がる、張り付く」などでは、V1の主語は実現されない。

(B) 非対格性の義務的受け継ぎ (由本 2003, 2005a)

「他動性調和の原則」 (影山 1993)

(√unaccusative + unaccusative, \*unaccusative+unergative/VT)

VT+unaccusative → unaccusative cf. (12a,b) \*VT

unaccusative +VT → unaccusative cf. (7) \*VT

unaccusative + unergative → unaccusative cf. (9)

unergative+unaccusative → unaccusative cf. (13a)

(21) a.\*大地震がビルを起こり倒した。

b.\*がけが民家を崩れ壊した。(影山1999:215 「事象構造の不適格性」)

3. 語彙的複合動詞を作るV2が選択する動名詞の項実現

Type A 補文関係の複合動詞を形成するタイプ

(22) a. {住所欄 (〜) の/??住所欄に} 記入を漏らした。

ワープロで\*(の)記録を漏らした。(cf. 外部に報告を漏らす。)

- b. {エベレストへの/?エベレストに/エベレスト} 登頂を果たした。
- c. {宇宙からの/?宇宙から} 生還を果たした。
- d. {メンバーへの/\*メンバーに} 報告を洩る。
- e. {海外への/\*海外に} 出張をこなす。

(23) xがzの記入を漏らす：

$$\left[ \begin{array}{c} x_i \text{ FAIL IN } [_{\text{Event}} y] \\ \uparrow \\ [_{\text{Event}} [x_i] \text{ WRITE } [z_j]] \end{array} \right] \quad (\text{cf. (18)})$$

Type B 本来モノである項を事象に拡張して複合動詞を形成するタイプ

(24) a. かける：「他に向けて動作・作用を及ぼす」

隣の人にことばをかける、近所に声をかける、子供に手をかける。

- b. {夜襲/催眠術/誘い/電話} をかける。
- c. 攻めかける、働きかける、話しかける、誘いかける、呼びかける
- d. {\*敵への/敵に} 夜襲をかける、{\*花子の/花子に} 催眠術をかける。

(25) a. 交わす：「互いにやったりとったりする。代わる代わる物事をする」

息子と杯を交わす、同僚とことばを交わす、旧友と手紙を交わす

- b. {握手/約束/挨拶} を交わす。
- c. 言い交わす、鳴き交わす、見交わす、取り交わす
- d. {ライバルと/\*ライバルとの} 握手を交わす、
- e. {恋人と/\*恋人との} 約束を交わす。

(26) a. xがzに{毛布/ことば}をかける

$$[[x_i] \text{ CONTROL } [[x_i] \text{ CAUSE } [\text{BECOME } [\text{BLANKET}/\boxed{\text{WORD}}] \text{ BE } [\text{ON } [z_j]]]]]]$$

↑  
特質構造からの事象構造を代入

b. x がzに夜襲をかける、x がzに攻めかける：

$$\left[ \begin{array}{c} [[x_i] \text{ CONTROL } [[x_i] \text{ CAUSE } [\text{BECOME } [y] \text{ BE } [\text{ON } [z_j]]]]]] \\ \uparrow \\ [_{\text{Event}} [x_i] \text{ CONTROL } [[x_i] \text{ ACT ON } [z_j]]] \end{array} \right]$$

TypeBでは本来Thingである項にEventが代入されておりV2の項との同定があるのでNP内に項を実現できない (特質構造も利用され得る)。TypeAは本来Event項をとり補文構造をもつのでNP内でも項の実現が可能である。

#### 4. 統語的複合動詞における項実現と格表示

- ① VP complement type: (a) raising type 過ぎる、かける、得る、だす  
(b) control type 損なう、慣れる、つける (始める)

- ② V<sup>0</sup> complement type: 忘れる、直す、終える、合う、遅れる (始める)

● 補文構造を保持しており、原則としてV1の項はそのまま実現されるため、V1の他動性や選択素性が複合動詞全体にそのまま受け継がれている。

(27) VI+VT → VI

- a. 溶け始める、咲き続ける、渴ききる、泣きだす、腐りかける

- b. 車 {に/\*を} 給油し終える、本庁 {に/\*を} 出頭しそこなう  
 ロンドンのパブ {に/?を} 行き尽くす、遊園地の乗り物に乗り尽くす

(28) VT+VI → VT

- a. ごはんを食べ終わった、申込書を出し遅れた。  
 b. その風景 {を/\*に} 見慣れている、魚 {を/\*に} 食べ飽きた。

(29) VIa+VIb → VIa

- a. ??出発時刻に発車し遅れる。  
 b. \*ヨーロッパに旅行し飽きる / ヨーロッパを旅行し飽きる。

(30) VTa+VTb → VTa

- a. 上司に帰国を報告し忘れる。      b. 斎藤選手からサインをもらい損ねた。

影山(1993 : 153-155、173)

「形態的に複合語の形式を取るから項構造が一体化するという分析(Rosen 1989など)は誤りである。複数の述語が「複合述語」として機能する場合、一つの名詞句がそれら複数の述語から別々にθ役割を与えられてもよい。重要なのはV2が補文の目的語にθ付与できるかという点である。」

- (31) a. ??電話を使い尽くす / 財産を使い尽くす。=>財産がなくなった  
 b. \*ぶらぶらと歩き終える / 一日の行程を歩き終える。=>全行程を終えた

- (32) a. 賞状が会長から入賞者に渡し終えられた。  
 b. ? 入賞者が会長から賞状を渡し終えられた。

- (33) a. 餌が飼犬にやり忘れられている。  
 b. 飼犬が餌をやり忘れられている。

- (34) a. デザートを食べ損なった。≠>デザートを損なった (台無しにした)  
 b. \*デザートが食べ損なわれた。

- (35) a. アメリカ人はさしみを食べつけている。≠>\*さしみをつけている  
 b. \*日本料理は食べつけられている。

- (36) a. ??[一位で走り]終えた / 一位で[走り終え]た。赤字で[印刷し直し]た。  
 b. \*医者 of 指示通り[おかゆだけを食べ]忘れた。→ V<sup>0</sup>補部型

・目的語はV2からもθ付与される可能性がある

- (37) [魚を生で食べ]つける、[君の案だけを受け]かねる。→VP補部型  
 ・V2はV1が作る補文を選択するのみ

- (38) a. 町屋を喫茶店に建て直す。(英語を日本語に直す)

- b. \*町屋を喫茶店に建てる。

(cf. \*テープをCDに聴き直す、\*英語の論文を和文に読み直す)

- c. 父と娘は慰め合った、健と翔は家族を紹介し合った。

- d. #父と娘が慰めた。#健と翔が家族を紹介した。

・V<sup>0</sup>補部型ではV2,V1双方の項が実現される

- (39) a. ?期限に申込書を出し遅れる / 役所への申込書の提出が期限に遅れる

- b. \*制限された量を飲み過ぎる vs. 酒を飲み過ぎる

・VP補部型ではV2の補部は事象以外実現されない

V<sub>0</sub>補部型では二つの動詞が結合する段階で単一の動詞に対応するLCSが合成され、それをもとに項の選択や実現が決定される可能性がある。

5. 統語的複合動詞を作るV2が選択する動名詞の項実現
- (40) a. A国は隣国に干渉しすぎる。(VP非対格型)  
 b. {A国は隣国への/A国の隣国への/\*A国は隣国に} 干渉が過ぎる。
- (41) a. 健は人前でピアノを演奏し慣れている。(VP補文型)  
 b. 健は {人前でのピアノの演奏に/\*人前で (ピアノの) 演奏に} 慣れている。  
 c. 花子は {老人との外国への旅行/\*老人と外国へ旅行} になれている。
- (42) a. 健は上司に結果を報告し終えて一息ついた。(V<sup>o</sup>補部型)  
 b. 健は {上司への/上司に} 結果の報告を終え一息ついた。  
 c. 健は赴任先から本社に書類の送付を終えた。  
 (d. ??健は上司に帰国すると連絡を終えた。  
 e. 健は上司に帰国すると連絡 (を) した。)
- (43) a. {被災地への/\*被災地に} 物資の供給が終わった。(VP補文型)  
 b. {イラクからの/\*イラクから} 撤収が終わった。
- (44) a. 健は上司に結果を {報告し忘れた/報告し遅れた} (V<sup>o</sup>補部型)  
 (??出張先から上司に結果の報告を忘れた)  
 b. 健は {上司への/上司に} 帰国の報告を忘れた。  
 c. {被災地への/被災地に} 物資の供給が遅れた。

統語的複合動詞を作るV2すべてにおいて「軽動詞構文」が可能というわけでない。一般に非対格型、コントロール型に関わらずVP補部をとるものでは容認されず、Vo型では容認され易い。Vo型の複合動詞を作るV2は、この構文でも、動名詞との結合時に概念構造で一塊の複雑述語を形成している可能性がある。

### 主要参考文献

- Grimshaw, J. & A. Mester. 1988. "Light Verbs and  $\theta$ -Marking." *LI* 19: 205-232.
- 影山太郎 1993. 『文法と語形成』 ひつじ書房
- 影山太郎 1999. 『形態論と意味』 くろしお出版
- Li, Y. 1990. "On V-V Compounds in Chinese." *NLLT* 8:177-207.
- Matsumoto, Y. 1996. *Complex Predicates in Japanese: A Syntactic and Semantic Study of the Notion 'Word'*. Kurosio & CSLI.
- Toratani, K. 2002. *The Morphosyntactic Structure and Logical Structures of Compound Verbs in Japanese*. PhD. Dissertation. University of New York.
- 由本陽子 2005a. 「複合動詞の統語素性」大石強他(編)『現代形態論の潮流』 pp.135-154. くろしお出版
- 由本陽子 2005b. 『複合動詞・派生動詞の意味と統語—モジュール形態論から見た日英語の動詞形成』 ひつじ書房
- 由本陽子 2005c. 「「V+かえる」と「V+直す」の意味と統語」『日本語文法』 5巻2号pp.110-127.